

開設二周年に当って

史料室だより
第5号
1983・2・21

二周年記念号
編集 田辺 真人
発行 神戸・深江会館
生活文化史料室
〒658 神戸市東灘区深江本町3-15-17
電話 神戸(078) 41110475

深江財産区管理会長 太田垣 正雄
生活文化史料館理事長

昭和五十五年春、私も深江財産区では田辺真人先生に編集を委嘱して、深江史誌刊行に着手しました。資料あつめのさなか、明治七年に建築され戦災を免がれた旧深山邸が改築されることになり、当主深山健二先生から旧邸内の古くからの所蔵品で史誌編集に役立つものがあれば総て提供する旨の申し出がありました。

早速調査願いましたところ、数多くの古文書始め貴重な資料が見られました。これらの散逸はまことに忍び難く、できれば資料館を設け一般に展示、後世に遺すべきだとの田辺先生の助言により、当時建築中の大日霊女神社の倉庫を急換二階建とし、その二階(十二坪)に深江生活文化史料室を開設しましたのが昭和五十六年二月。丁度二カ年を迎える今日までに、地域の方々のご協力により、二千点を越す資料が蒐まりました。

更にこのたび深江の神戸商船大学からも海事資料の展示協力のお話がまとまりました。

参観者も週二日(土、日曜)の開館ですが既に二千四百人(開館日一日平均一五人)を数える現状でございます。現在の設備では資料の格納・展示替等も意の如くならず、まことに狭隘な状態となっております。

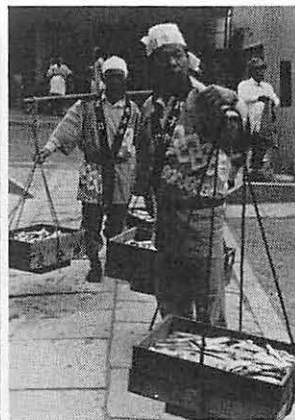
折角寄せて頂きましたこれら貴重な資料を有益に利用しますためにも、また子供達への教育的利用をはかるためにも、出来得れば施設を拡張したいと思っております。地域文化の一層の向上のため、大方向の皆様のご協力を得て増築計画を進めている次第でございます。

深山健二先生が史誌編さんのために投げられた資料寄贈の一石の波紋は、年と共に地域の方々との協力を得て、その輪を拡げ、多くの博物館・郷土館をはじめ海外の博物館とも協力関係を結び、交友を深めつつありますことは、まことに嬉びに耐えませぬ。

私たちの史料館は、国や府県、市などによる広大な博物館とは違って、どこまでも私達の祖先の遺し

た生活文化財を中心に、地域の特徴ある生活文化史料館として育て、今後も運営して参る所存でございます。

一方、史誌の編さんも、近世史料集の稿本も分析研究を進めており、史料館増築完成を期に史料編一号を刊行、以後続刊の予定です。また、近・現代の生活史については、近く口碑採集に着手し、本年中に原稿を完成し、次年度発行の考えでございます。どうか今後共、史料館に史誌編さんに格別のご協力を下さいますようお願いいたします。



昭和57年10月10日
魚をかついで魚屋道を歩く会。かつぐ魚の準備をする納多春雄氏。



魚屋道の記念碑
歩く会当日、昔あった道しるべに模して完成した石碑。

条里制研究からみた深江

神戸史学会代表 落合重信

明治一八年の陸地測量部の地図で、(第1図参照)深江村あたりを見ていて、まず目につくのは、フォーク状の高橋川であろう。東から伊勢野川・四ツ松川(宮川)・串田川・横川・要玄寺川である。そのうち

横川が延々一〇町(約一キロメートル)も東西に流れているということは(現在は変っているが)、神戸地方としては尋常ではない。うしろに六甲山系を負い、その岩石が花崗岩だから、風化した砂をどどんと流し、しかも海が近いために、川はすべて直線的に南北に流れる。だからこの川が東西に長く流れているということは、人為的な工作が施されていることを示している。

それは、一町方格に区切って開拓していった条里制の耕地へ灌漑するために、耕地に添うように流路を変えたものである。横川は、旧岡本梅林のあたりから流れてくる背谷川・天上川の水を福井池・皿池の二つの池あたりで受けて、そこから条里耕地に添って、東へ約一キロメートルの高橋川へ合流させたものである。

この地方の条里制研究は、吉井良尚氏の「武庫郡の条里〔実は菟原郡の条里〕」(兵庫県史跡名勝天然記念物調査報告第十一輯 昭10・3)にはじまる。吉井氏は付図として詳細な復原図を付けておられる(第1図)。吉井氏はその復原図に「条」「里」を記入しておられないが、打出・西宮界の堀切川あたりを一条とし、それより西

へ十五条を数えて、西灘・葦合界あたりで終る。里は、山すそからはじまって海岸まで四里とする、ものである。

それでは、その一町角に区切って開拓してゆく条里制開拓が施工されたのはいつのころであろう。だいたい条里制の開拓の時期は、中期古墳が盛んに築造された五世紀から、班田収授の廃絶する一〇世紀ごろまでの間だとされている。この間にあつて、地方地方の状況によって開拓の時期を定めてゆくわけだが、わたしは、その開拓時期を、菟原郡に存在する岡本へボソ塚と三つのおとめ塚古墳との関係から求めてみようとした。(拙著『条里制』吉川弘文館)

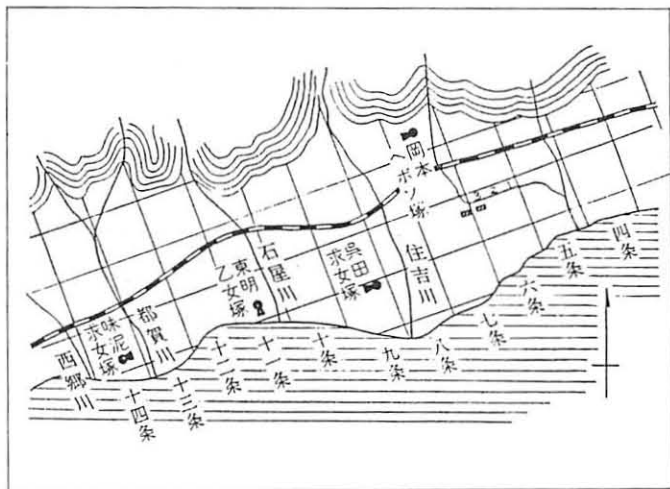
- 三つのおとめ塚というのは、東から、
- (1) 呉田の求女塚(東灘区住吉町呉田)
 - (2) 東明の乙女塚(東灘区御影石町)
 - (3) 味泥の求女塚(灘区都通二丁目)

それぞれ一・五キロないし二キロの等間隔をもって存在し、いずれも山麓からはなれて、きわめて海岸に接近して存在する(第2図)。これらの中期古墳が築かれたころ——それは同時ではなく一世代一基と考えるのであるが、山麓から海岸の間に横たわる十キロあまりの長さの帯のような細長い平野はどうなっていたのであろうか。まったく未開拓であつては、次々それらの古墳が海岸に築かれてゆけるわけがないとすれば、そのころすでに、代制度にしろ条里制



第1図 菟原郡条里復原図(吉井良尚氏)

にしろ広大な農地開拓がおこなわれていたとしなければならぬ。そして代制とは私たちのいう長地形



第2図 青森県西目黒郡条里における三つのおとめ塚とへぼん塚

地割をもつ条里制にほかならない。現在もなお顕著にのこる免原郡の条里制遺構がそれである。私たちはこの三つの古墳に、さらに岡本のへぼん塚(第2図参照)を加えることによって、次のようなことを考える。

岡本へぼん塚古墳は、前期古墳として、全国でも最も古い古墳の一つに数えられているが、出土品として現在知られているものは、盗掘品を買戻したものだから、その全貌はも一つ明らかでないけれど、主要なものとして、

- 石釧 一個
- 鏡 六面(三角緑華紋帯二神二獸鏡二面、き鳳鏡、

環状乳絵模様帯神獸鏡、平縁式二神二獸鏡、獸帯鏡)

があげられる。呉田の求女塚の出土品も全部が収められていないので全貌はわからないが、

石釧 一個

鏡 六面(長直子孫内行花文鏡、絵模様帯四神四獸

鏡、三角緑華紋帯四神四獸鏡、三角緑三神

三獸鏡)

出土品が大体似ているので、この古墳もへぼん古墳と同様、前期古墳に数えられたが、その後の小林行雄氏の同范鏡の研究によると、この方は今まで考えられたよりかなり時代がくだるものとされるようになった。私たちはその立地条件から、中期にかかるものという見解をとる。

三つのおとめ塚のうち右の呉田の求女塚はすでに完全に破壊されてしまっていて、墳形を明らかにしづらいが、東明の乙女塚と、味泥の求女塚では、同じ前方後円墳ではあるが、墳形において明らかかな時代の推移が見られる。東明のは中期の典型的な形をしており、味泥のは前方部が大きく明らかに前方後円墳として後期の様相を示している。呉田との間において時代的つながりを明らかにしえないけれど、一方が前期古墳とみられる出土品を出しているところから、呉田の方が古いことほぼ確かであろう。そうすると、

へぼん塚↓呉田…東明↓味泥

の関係はさらに、すすんで、

へぼん塚↓呉田↓東明↓味泥

の関係が推測され、東から順次西へ移っている状態が明らかになる。そしてさらにへぼん塚から呉田

神戸華僑歴史博物館 (館長 陳 徳仁)

9時~17時 (年中無休)
大人 300円 学生 200円 (10人以上団体割引有)
国鉄元町駅 西口から南へ5分の海岸通角
〒650 神戸市中央区海岸通3丁目東南角KCCビル2階
☎ (078) 331-1277

井上郷土玩具館 (館長 井上重義)

10時~17時 毎週水曜休館 (祝日は開館・翌日休館)
姫路駅から⇒国鉄播但線で23分の香呂駅下車
東へ徒歩10分。
〒697-21 兵庫県神崎郡香直町中仁野671-3
☎ (07933) 2-4388

入会のおすすめ 神戸史学会 (代表 落合重信)

機関誌「歴史と神戸」(隔月刊)
会費・年額 2,000円 (1~12月分前納)

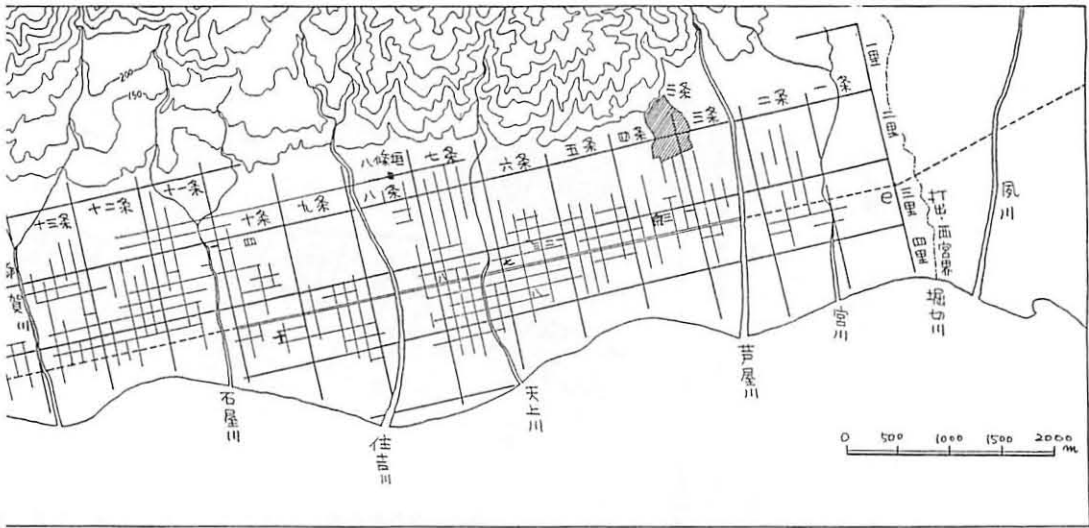
〒653 神戸市長田区川西通3丁目8 太陽印刷内
☎ (078) 691-2085 振替口座 神戸4018

SUN-TV

サンテレビジョン

〒650 神戸市中央区港島中町6丁目9番1
TEL(078)302-3333(代)

第3図 莒原郡条里制復原図（吉本昌弘氏原図）



求女塚に移る間に山麓から平野地帯の海岸寄りに移っているのが見られる。この地方の最初の条里制開拓は、このヘボン塚築造と呉田求女塚築造の間に求められる。古墳の編年がもつと精密になり確かなられば、この地方の条里制開拓の時期はかなりなところまで確かめ得られるのではあるまいか。

吉井良尚氏によっておこなわれた復原図についてよく見ると、今まで誰も注意しなかったけれど、一町角の条里復原方格線と条里遺構道路との間に一致しない部分が見られる。

吉井氏の復原図は旧本山村小路一ノ坪・二ノ坪同村北畑三ノ坪の並ぶあたりを基準としたとみえて、六条～九条のあたりは方格線と道路が一致しているけれど、十条の石屋あたりから西においてはズレが目立ち、それから西へ行くにしたがってズレは大きく、十四条に至っては、二十間あまりのズレをみせているのだから大きい（第1図）。石屋川あたりで、条里の設計・施工方法・時期が変わっているのではないかという感が深い。

そういうえば、復原の基準とされたかと思える六条から東へ行っても、まだそこにズレが目につく。東から芦屋川・住吉川・石屋川あたりを中心におおのの開拓の時期が違ふところから、このようなズレが生じたのではなからうか。それは、四つの古墳の区分と必ずしも一致しないけれど、傾向としては、同じである。

以上によって、わたしはこの地方の条里制開拓を中期古墳の時代五世紀にはじまったとする。もちろん開拓即農地＝水田化ということではない。その熟田化のためには長い歳月を要したことであろう。

（復原図（第1図）からいうと、深江村は四条四里あたりに当る。吉本昌弘氏の復原図（第2図）に見られるように、三条には三条村が、八条には岡本村の八条垣（内）がある。条を名乗る集落があるということは、その条内にそこだけにしか集落がないということであるから（他にも集落があればその名称では他とまぎれる）、このあたりでは集落が山寄りであったことを示している。もちろん古代では集落は多く山寄りであることを通例としているが。だから深江集落ができるのは、それよりかなり時代が降るものとみなければならぬ。それでは、深江村の属する四条・五条には古代集落はなかったであろうか。これも山寄りにあつて、古い伝承を持つ稲荷神社の森集落であつたと考えられる。

稲荷神社（本山北町、丁目
国領津守山、辰野町、東一丁目）

祭神は宇迦御魂神ほか六柱。神社の縁起では、元正天皇の霊亀元年（七一五）卯月初卯の日のよる、この浦の海辺に光るものがあるので、村人はふしぎに思つて海辺に集まると、一基の御輿（みこし）が波に浮んで寄つて来た。そして、われは稲荷大明神の奇魂（くしたま）であるが、この山辺の森にまつれば里人を幸福に守ろう、と告げられたので、現在の地へまつり、その日を吉日として毎年祭りをしたところ、五穀ゆたかに村は栄えたという。

海からあがられた場所は、寛政一〇年（一七九八）の『摂津名所図会』によると、深江のオドリ松の地（商船大学の敷地内）であるとされている。祭日には、そこまで神幸式があつたが、明治以降は絶えている。神社の古文書は文禄年中（一五九



二丁の火災で失われ、元禄(一六八八)以後の記録がのこっているという。

(『神戸の史跡』昭50年版)

ここにみられることから考えると、深江は森集落・稲荷神社と深いつながりを持つ漁村から発達したものとと思われる。実測図(第一図)による等高線を見てわかるように、ずっと古い時代には住吉川と芦屋川の扇状地(もう少し詳しくいえば、天上川系と芦屋川との)に挟まれて湾入した深江の地であった。

二つの扇状地に挟まれた土地であったから、前にあげた五つの川がここに流れ込むことになった。そしてそれらの川の多くは条里制耕地に規制されている。その規制は条里制耕地への灌漑のためであったから、条里制開拓地のうちでも灌漑に恵まれていた。だから、農作物は稔り多く、漁村としてばかりでなく、農村として発達する要素を持っていたことが考えられる。(村内には、また三王坪、泉坪といった条里坪付の字名もある)。

それでは、律令制の郷(それは多分芦屋郷であったと思われるが)の中から、独立した集落として深江が生まれてくるのは、いつからであろうか。

確かな文献の出現を見ないかぎり、わからないと

いうよりほかない。ただ近隣の例からみて、平安末期・鎌倉初期ではないかと想像してみるだけである。実測図(第一図)でみると、現在の海岸線は、住吉川・芦屋川の流す土砂によって、深江であったものが埋められてゆき、比較的なだらかになったものであろうが、五丁ないし、二・五丁等高線でみると、はっきりその湾入の様相がわかり、しかも深江集落(青木もそうだが)はそれより南にあるのが見られる。

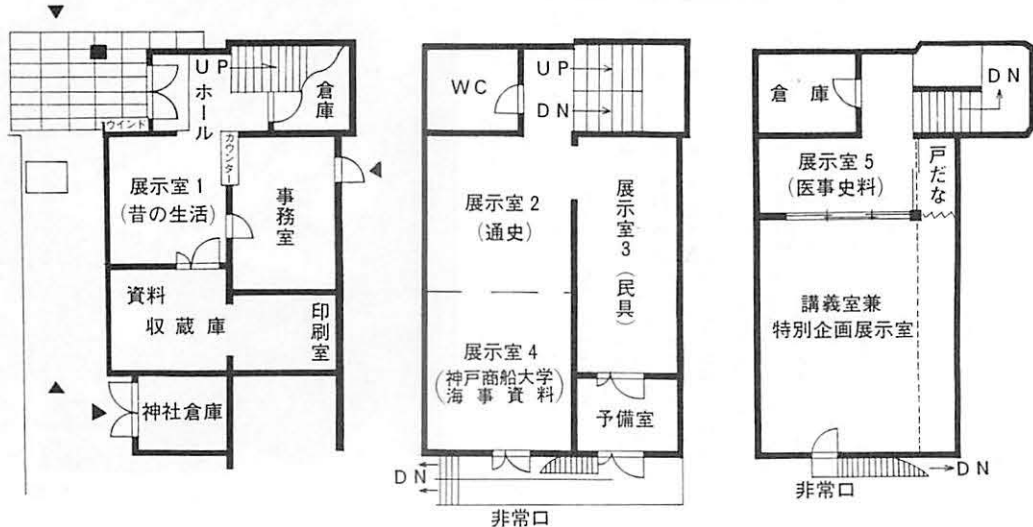
三丁・四丁等高線は、だいたい約五・六千年前の縄文海進を示す線だといわれるから、ほぼ縄文中期・後期の様相を示すものである。そして次第に海退がはじまり、弥生中期(西暦紀元ごろ)には、弥生小海退といつて最高潮に至し、現在の海面より一丁も低下したといわれる(神戸市立教育研究所『六甲の森と大阪湾の誕生』)。そしてそれが現在の海岸線に復するには、土地土地の状況によってちがうようである。明石林崎のように岬の突出部分が海面下に没してしまっているようなところもあれば、弥生時代より逸かに陸地が進出しているところもある。弥生小海退二丁というのはそのまま一般的に信じてよいのであろうか。その方面に暗いわたしにはなんとも言えない。ただ「深江」の名をのこしているということは、弥生時代以後もなお、まだ湾入の様相なり、何らかの印象をのこしていたとしなければならぬと思うが、いかがなものであろうか。

友の会会員募集中

年間会費千円を前納、史料室員まで。

郵便振替・神戸三二二四四〇八深江会館史料室友の会

昭和58年4月着工 9月完成予定の 史料館増築案間取図



神戸・深江

町の'民俗博物館、定着

民具提供2千点 増築も検討

逸すれば二度と戻らない、と深江の生まれた町の歴史を知ろう江門産区管理会が保管、展示用の会館としてつくった。地元の旧家などから寄せられた民具類千二百点でスタートしたが、その後二十軒くらいからの提供があり約二千点に。深江地区は高潮被害や激しい空襲のため、残っているものは少ないといわれたが、漁具や生活用具、古い写真などが集まった。開館は土、日曜だけだが、子ども連れの入館者が多いため、夏休み中は、農、漁具や酒造りの用具などを中心に約四百点を展示、昔の生産活動をしのんでらう。

同管理会会長の太田垣正雄さん(左)は「子どもたちが、自分達の生まれた町の歴史を知ろうという姿勢は大切にしたい。予想以上に提供も多く、史料室が手狭になったので、増築を検討している」といふ。史料室の受け付けや資料整理は、大学、高校生ら七、八人が交代で手伝っており、関学大四年長岡晴子さん(右)は「近世史を専攻しているが、民具には、生きた生活の年輪があり、勉強になりませう。増築計画では、歴史教室を開いたり、土地の人の絵や写真展などができる部屋がほしい」といふ。

開館は土、日曜の午前十一時～午後五時で無料。



地元で提供された漁具や生活用具を並べた「昔の暮らし展」＝神戸市東灘区深江本町3丁目、深江会館内で

言 宣 新 聞 昭和58年(1983年)1月29日 (土曜日)

広さ5倍、3階に増築

海や医の資料も展示

——深江会館生活史料室



拡張計画がまとまった生活史料室

わが町の民俗博物館として地域の人たちに親しまれている神戸市東灘区深江本町三、深江大日神社境内にある「神戸深江会館生活史料室」(田辺真人室長)の増築計画が、二月二十一日の開設一周年を前に具体化し、約三千万円をかけ、現在の五倍に広げ、今年八月ごろオープンすることになった。

史料室は五十六年に、深江財産区管理会(太田垣正雄会長)が村史づくりを計画した際、基礎史料として、地域の各家に残されていた生活用品を提供してもらい、約千点を整理、展示するために開設された。

江戸時代後期の種痘の記録や、明治時代の顕微鏡、大正時代のカメラや蓄音機など、当時の暮らしぶりをほうふつとさせる貴重な品

物ばかりで、開設当時から四十三平方メートルのスペースでは一度に展示できず、年四回に分けて展示品を順次入れ替えていた。

その後も地域の消防団、婦人会や個人からの提供品が増え続け、今では収蔵品は二千点になった。中には深江漁協から提供された長さ二十センチもある漁網など大きくて展示できないものもあり、せっかくの史料を倉庫に眠らせておくのは惜しいと、増築に踏み切った。

計画によると、増築部分は鉄筋コンクリート三階建て、延べ床面積約二百三十平方メートル。一階に百年前の暮らしを再現した展示室、二階に民具展示室と神戸商船大学保存の和船の道具類や航海図などを借りて展示する海事資料室、三階に医事資料室と小ホールを作る。

増築計画と今後の運営

県立御影高校教諭
生活文化史料室長

田辺 真人

旧本庄・深江の村誌編集を計画した財産区の呼びかけに対して、深江の住民はじめ多くの市民から多くの生活文化財が寄贈されました。それらが街かどの歴史や祖先の生活の歩みを知らせてくれる貴重な歴史資料であることを理解した財産区では、昭和五十六年にこれらの資料の保存・展示施設として、公民館である深江会館の北に別館として「生活文化史料室」を開設しました。

観光地でもない深江で手持ちの資料でこのような施設を作ったものの、関係者一同はその将来性に不安を抱いて出発しました。つまり、来館者が続くか

どうか、また展示に耐える質量の資料が収集できるかどうか――。

ところが、開館してみると、史料室は予想以上に好評でした。地方の時代が叫ばれ、歴史教育の分野でも地域社会の歴史と文化の学習の必要性が確認されつつある昨今、わが街のわれわれの祖先の歴史を知ろうという市民の反響は大きく、この二年間で二千五百名、ほぼ月平均百名の見学者が、土・日曜の公開日に展示室を訪ねられました。当初千点であった資料も、その後の「寄贈が続く二千点と倍増。側面から史料室を支えよう」という友の会も、現在では



目と足で学ぶ

「兵庫の顔」は、何の資料も、知らないとは本館にあればある程度、その「顔」を知ることが出来る。教壇に立って、半日分の「目と足で学ぶ」講座を開催し、歴史資料「顔」の魅力を伝える。

歴史資料を愛する 田辺 真人さん 34

本館は県立御影高校の別館として、開館して以来、多くの市民から生活文化財が寄贈され、展示室が充実してまいりました。この「兵庫の顔」講座は、歴史資料の魅力を伝えるため、毎月第一土曜日の午後二時から、本館で開催されています。講座では、歴史資料の魅力を伝えるだけでなく、展示室の歴史や、展示室の運営についても詳しく説明いたします。また、展示室の歴史や、展示室の運営についても詳しく説明いたします。また、展示室の歴史や、展示室の運営についても詳しく説明いたします。

二百三十名の大所帯で活発に見学会や講演会を開いて活動しています。見学者や住民の中から狭すぎるという声が続々と高まり、現在の施設では展示不能な大きな資料が漁協などから寄贈され、とうとう財産区では、神戸市当局や深江住民の協力で、史料室の大拡張に踏み切りました。

計画では、財源や敷地に関する条件が許すかぎり、深江が後世に遺すに足る文化施設にしようという認識のもとに、鉄筋三階建て床面積は現在の六倍強に。一階には「昔の生活室」で百年前の深江の展示を行い、研究室と資料収蔵庫を置きます。二階は「通史展示室」と「民具展示室」(これが今の展示室)に加えて、開設以来、ご後援して下さった神戸商船大学との提携で、「神戸商船大学海事資料展示室」を設置します。そして三階には、開設のきっかけとなった大量の民具の一括寄贈をして下さった深山健二家からの資料を中心に、「医事史料展示室」を設け、「講義室兼特別企画展示室」を作ります。この部屋は、歴史教室や講演会のほか、絵や写真をたしなめる地域住民の方々に、ミニ個展の場として提供したいと考えています。

聞き書き調査に当つて

望月 浩

史料室調査員そして深江の史誌編さんに関する聞き書き調査を担当することになった望月浩です。

私が深江の史料室を初めて訪れたのは、去年の九月半ばでした。大学で博物館のレポートを書くことになり、「地域の人たちの手づくりられた！」という説明文句にひかれ、深江の史料室を訪ねたのでした。そして、受付の女性の親切な説明を聞きながら、整然と並べられた史料を見学させてもらいました。そこで、田辺先生にお会いしたのでした。須磨高校の地歴部のときに、顧問の位原先生の話などから名前がよく耳にしていたのですが、気むづかしい先生を想像していたら、とても気さくな先生でした。やがて、民俗調査を試してみないかと言われた時は、意欲と不安が半々でした。初めのうちは、訪ねた家が留守だとほととずする事もありましたが、そのうちに慣れてきて、いろいろなお話を聞きだせるようになりました。自分では、無我夢中でやりましたが、昔の生活に関する知識の不足を痛感しました。

昨年からこの民俗調査の体験を、今後の深江の聞き書き調査に生かしたいと思えます。今は各種の民俗調査の報告書を読んで、これからの調査のヒントにしようと思っています。

若輩ですが、深江の史料編集に微力を尽くしますので、聞き書きに参りました時には、ご協力をお願いします。(史料室調査員・花園大学史学科生)

史料室から 赤松 豊子

史料室も今年二月で満二才、秋には増築工事も完成する予定です。ここまで順調に発展してまいりましたのも、ひとえに深江住民や見学に来られた皆様のおかげと、深く感謝しています。

展示室内の「見学者のおと」は、多くの小学生の落書きがありますが、昔の品物について非常に興味があるようです。展示中の古銭・ままごと道具・蓄音機・扇風機などのことが、よく書かれています。大人の私たちは、懐しく思われたり、よく保存されていたなあと感じられたり、今後このような活動を続けて下さいというご意見をよく書かれています。当初から倍増した資料ですが、改めて、ご寄贈下さった方々のご芳名を記し、感謝いたします。

深山健二・生活用具、史料等/伊吹順隆・書籍、地図/清水久雄・古銭、額/志井正夫・講義、日本歴史等書籍/永井博彦・証書、写真等/神戸市教育委員会文化課・文献史料、民俗芸能等書籍/黒田博・時計/中川文雄・本山村誌/小西秋二・生活用具/三浦文子・ままごと道具/結城正福・世界の歴史等書籍/岩本正義・抹茶々碗/金岡章文・菟原郡地図/志井保治・戦時資料類/鎌田武・大漁職等/林芳男・書籍/深江青年団・青年団資料/久保川章雄・戦時資料等/松本ヤス・教育資料等/太田垣正雄・火縄銃、書籍等/田辺眞人・書籍、新聞等/深江消防団・半鐘、消防史料/梶正岡・直時資料、火鉢/志井礼子・葉書/寺田徳雄・古写真/岡田直広・古写真/芦原常夫・大漁旗等漁具/森信夫・農具等/中山菊治・網、カジ/大川常夫・つるべ、くま手/宇都宮宇作・ラジオ/藤田望・古銭/氣賀隆子・古銭/吉川徹・竿秤、軸等/永田健・古文書、酒造史料等/納多和夫・印章、宝章/上田儀重郎・生活用具/深江大日神社大鳥居再建奉賛会・写真/新田利隆・天びん棒、かつぎ棒/福井健一・古銭/梶井一正・旧青木村地図 (史料室主事)

編者から

何とか二年が終わりましたが、月何とかが終りましたが、月百名の見学者・その一割での友の会々員増・統々と寄贈して下さる資料と、順調に記録が更新される感じで、関係者一同は大感謝です。史料室だより第五号には、神戸の歴史の権威・落合重信先生から古代の土地制度に関するご論考を頂きました。別冊に友の会二年日の特集号を作りましたが、同会もすでに二百名を超えて大所帯、

協力団体

神戸市教育委員会
神戸市教育委員会
国立神戸商船大学
神戸市立森林植物園
明石市立天文学堂
神戸華僑歴史博物館
神戶華僑歴史博物館
井上郷土玩具館
深江青少年協議会
深江ジョッピングセンター

史料室役員 (五十音順)

理事
太田垣正雄 岡田龍太郎
志井 正雄 志井 保治
田辺 眞人 永井 一郎
中尾 久一 松尾 福夫
深山 健二
調査員
赤松 豊子 天田 晃司
伊東 玲子 尾崎 京子
小野山和子 金原 浩司
北島もと子 磯崎山英樹
谷口美登里 永井 真治
長岡 暎子 藤田 望
三浦 文子 望月 浩
結城 正福

友の会幹事

小嶋 悦郎 志井 保治
寺岡 一夫 門前 喜康
渡部 永子 (以上常任)
植本 敏紀 植本笑美子
大川 弘 佐野 末夫
佐原 浩平 清水 久雄
多田 康治 田辺ゆかり
納多 春雄 門前 寛子

『神戸の歴史ノート』

さんちかインフォメーション
ヨングラフィック、市内有名書店で好評発売中
定価2000円